美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2016 January/February

TAKE FREE

NO.33

特集

庄内 文学の風景

庄内憧憬

池澤 夏樹

作家

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2016 January/February

平成28年1月1日発行（偶月奇数月発行）第6巻3号（通巻33号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-31（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

謹賀新年

鶴岡市／羽黒山五重塔

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

庄内藩と近代史

池澤夏樹

明治維新前後の庄内藩の動きは目覚ましいし、その後、庄内をはじめとする東北地方と歴史の関わりも複雑怪奇で興味ぶかい。

ぼくは北海道の生まれだが、松前藩は米作に依らない特異な藩で、蝦夷地とは要するに植民地だった。そのためかぼくの頭には藩という江戸時代の行政単位が入っていない。山形県や石川県に二つ空港がある理由になかなか思い至らない。

明治以降の日本を考える時には幕末に戻って諸藩のふるまいを見なければならないらしい。先日、三度目に鶴岡に行った時もそのお勉強をしてからと思いながら、事前には間に合わなかった。

明治維新前後の庄内藩の動きは目覚ましいし、その後、庄内をはじめとする東北地方と歴史の関わりも複雑怪奇で興味ぶかい。そういう関心から遅ればせに何冊かの本を読んだ。

安倍政権の現状を見ればわかるとおり、政治とは幻想によって人心を束ねるテクノロジーである。「三本の矢」と同じように「官軍／賊軍」もそのためのマジックワードだった。鳥羽・伏見の戦いで薩長の軍は錦の御旗を捏造し、勝手に天皇を担いで徳川の軍を朝敵に仕立てる宣伝戦で勝った。

その後が戊辰戦争だが、四分五裂に終わった奥羽越列藩同盟の中で庄内藩は会津藩と共によく戦い、戦闘ではすべての局面で勝ったけれど、戦争としては負けた。より大きな状況に負けたと言うべきだろう。

会津が徹底的に苛められたのと対照的に、庄内がまだしも救われたのは、西郷隆盛の口添えのおかげだったと伝えられる。

その先、日本は「官軍」すなわち長州と薩摩の圧倒的な支配のもとに置かれた。東北出身の者はそれだけで出世の道を絶たれた。具体的に言えば、日清・日露の戦争の時期、陸軍大将の出自を見ると十四名のうちの十三名が薩長。それもやがて薩摩は脱落して長州独裁の天下になる。

東北で賊軍の子として生まれた者は、官僚としても財界でも出世の途がない。唯一残った道が成績主義に徹した軍隊だった。それを辿った典型が岩手にルーツを持つ東條英機で、長州閥への反感から日本を破滅に導いた（これは要約しすぎだが）。成績主義は優等生を生むが、彼らには現実と対決する世間知がない。

こういう状況で別格の思想家＝実践者が大川周明と石原莞爾。なぜ庄内がこういう人物を生んだのか、それを後日の課題としよう。

参考＝半藤一利・保阪正康著『賊軍の昭和史』（東洋経済新報社）ほか

いけざわ・なつき／作家。1945年北海道帯広市に生まれる。埼玉大学理工学部中退。1987年に『スティル・ライフ』で芥川賞を受賞。その後の作品に『マシアス・ギリの失脚』、『花を運ぶ妹』、『静かな大地』、『キップをなくして』、『カデナ』、『言葉の流星群』、『星界からの報告』など。最新作は小説『アトミック・ボックス』。2011年に完結した『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集』に続いて、2014年末から『池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集』を刊行中。

酒田市立光丘文庫では、石原莞爾、大川周明の旧蔵書を数千点にわたって収蔵。閲覧が可能となっている。

特集 | Special Edition

庄内 文学の風景

ふと印象的な風景に出会ったとき、
あるいはその土地に何かを読み取ったとき、
抱えていたイメージが輪郭を持って動き出す。
庄内を舞台とする数々の名作も、
そうして生まれたのかもしれません。

協力＝鶴岡市教育委員会、森敦文学保存会、森富子
佐藤俊和（横光利一を顕彰する会）、浜中自治会

森敦『われ逝くもののごとく』の舞台となった鶴岡市加茂地区。

特集 | Special Edition

文学の風景

庄内

横光利一『夜の靴』

文・井上明芳
text by Inoue Akiyoshi

敗戦という未曾有の惨状に対して横光が示したのは、傷つき疲弊した人々の支えとなるべき、未来の物語であった。

黄金色に輝く「一番日本らしい風景」

小説『夜の靴』の舞台となった鶴岡市上郷地区は、昭和20年に横光利一が家族と疎開した地である。小説内でこの地は遠い昔、東羽黒に敗れた西羽黒の「古戦場」として描かれている。

本書を片手にこの地を歩けば、横光が描いた通りの風景を現在も見ることができる。羽前水沢駅から荒倉山に向かう道は道路幅こそ違うが今でも「真一文字の道」であり、鞍乗峠からは日本海を臨む「眺望絶佳」の景色が広がっている。横光が感動し、「一番日本らしい風景」と記した稲穂が黄金色に輝く風景は、今も変わらず初秋に豊かな実りを見せている。上郷地区に西羽黒の「古戦場」というイメージはもはやなく、あるとすれば〝復興を遂げた姿〟である。横光が疎開した時も同じであったであろう。しかし横光はこの地を「古戦場」として描き、そこに昭和の敗戦を接続させた。このことは、敗戦した日本がこの地と同じように、やがてその爪痕さえなくなるほどに復興すると、横光が予見していたからと言えないだろうか。敗戦という事実をどう受け止め、新しい時代にいかにつないでいくか―。横光が示した戦後日本の行く末は、上郷地区の風景やそこに暮らす人々の姿にあったのである。

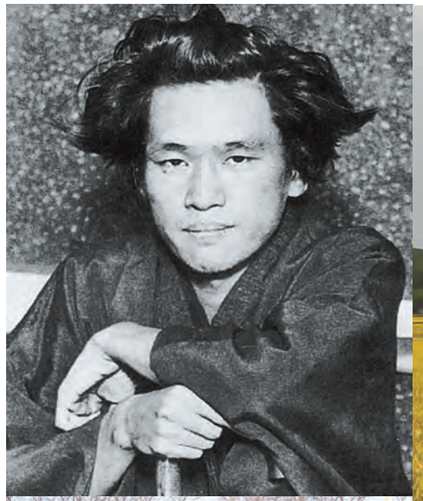
興味深いのは、上郷地区の人々の協力のもと、この地の歴史などを調査した結果、上郷地区の西羽黒の敗戦は、史実ではなく、幕末期庄内藩の史家・安倍親任（ちかとう）が記した『筆濃餘理（ふでのあまり）』などに記されているということが確認された。

未来への物語を受け継ぐ「横光利一を顕彰する会」

この記は、安倍氏が数多くの歴史資料をもとにまとめた歴史物語と言えるだろう。つまり西羽黒を「古戦場」とする捉え方は物語だったのであり、したがって昭和の敗戦を西羽黒の敗戦に接続させた小説は、やがて遂げるであろう日本の復興を物語としているのである。

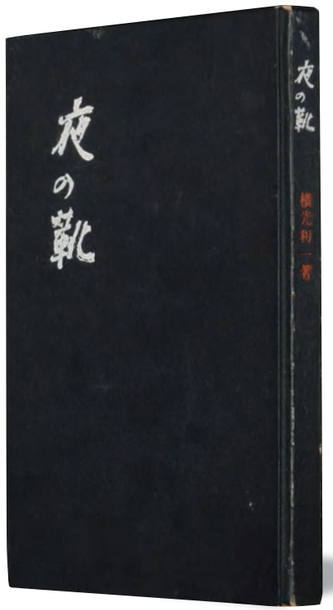
敗戦という未曾有の惨状に対して横光が示したのは、今すぐに必要な救援の言葉ではなかった。「一番日本らしい風景」の、安んじて暮らしている地があるという確固たる事実を示して、傷つき疲弊した人々の支えとなるべき、来たるべき未来の物語であった。

2000年9月、横光利一生誕百年を機に、上郷地区山口公民館に『夜の靴』文学碑が建立された。ご子息の佑典氏が『夜の靴』の一節を揮毫し、横光に私淑した清水基吉氏の俳句が刻まれた稀有な碑である。このとき行われた調査によって、横光に関するさまざまな事実が判明し、その成果は『横光利一と鶴岡』という一書にまとめられた。現在も「横光利一を顕彰する会」が顕彰行事を続けている。この活動は、上郷の歴史を知ることにつながる。そして、『夜の靴』という来たるべき未来への物語を受け継ぐ希望となっている。



（右）小説内で「一番日本らしい風景」と記された鶴岡市上郷地区。（左下）上郷地区では地元の人たちによって小説ゆかりの地に案内用の看板が立てられ、舞台マップなども作成されている。

よこみつ・りいち／1898―1947。福島県生まれ。菊池寛に師事し、川端康成らと「文藝時代」を創刊。数々の実験的小説を試み、「文学の神様」と称された。1927年、菊池寛の晩酌で結婚。妻の実家が鶴岡市鳥居町にあったことから以後、度々鶴岡を訪れ、疎開先での体験を基に『夜の靴』が生まれた。代表作『上海』『旅愁』など。



写真の初版本は現在入手困難
題字は横光本人によるもの

あらすじ

横光利一・生前最後の単行本で、敗戦後文学の傑作といわれる。「終戦の日から自宅へ帰るまでの、およそ百ケ日間」の疎開生活での見聞を、日記形式で描いた作品である。1945年8月15日、敗戦の報に衝撃を受けた「私」は、疎開先の参右衛門や久左衛門などとの交流を通して、農業を営む人々やその地に対する敬意、「米」の美しさを語る。本格的な冬の到来を前に「私」は去る。東京の自宅に着くのは12月8日であった。（鎌倉文庫）

いのうえ・あきよし／1969年、山梨県生まれ。國學院大學大学院博士課程後期満期退学。博士（文学）。現在、國學院大學准教授。専門は近代文学。横光利一、森敦を中心に研究。著書に『文学表象論・序説』（翰林書房）。

森敦『われ逝くもののごとく』

文・春山進
text by Harayama Susumu

50人を超える登場人物の3割が逝き過ぎる物語

「きみなら、何を書きたい？」
「登場人物が、次々死んでいく話を書きたいわ」
とっさに言うと、チチの目がキラッと光った。「そうーかあー」
森富子『森敦との時間』

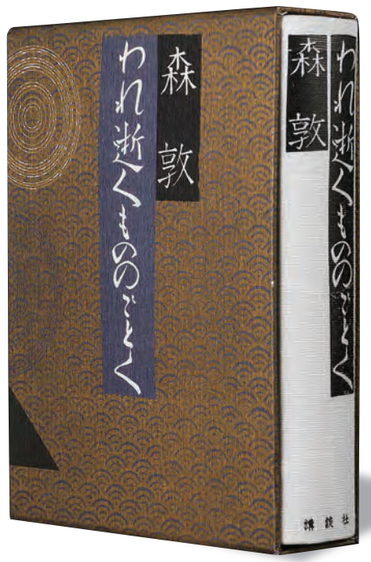
これをキッカケとして、原稿用紙で1209枚、文庫版にして830頁にもなる、『われ逝くもののごとく』が紡がれてゆくことになる。登場人物は50人以上を数え、あまつさえ、その3割近くが、逝き過ぎるのである。読むまえから辟易するかも知れない。しかし、作者は巧妙に読者を引きずり込む。小説の背後に潜む難解な文学理論（関心のある向きは『意味の変容』を）などは、おくびにも出さずにである。

読者は、なによりも、その舞台である山形県庄内地方の風土と登場人物一人一人のリアリティーに引きつけられる。それは、戦後の昭和24年から断続的に足かけ10年、庄内地方を転々と放浪した体験の裏付けがあり、人々との交流があり、作家としての観察眼によって刻み込まれたものであった。

（左）森敦が通った加茂と大山をつなぐ旧加茂坂トンネル。作品内では「それを抜けるともう加茂ではありません。縹渺たる別世界であります」と語られる。（右上）鶴岡市清水地区三森山の「モリ供養」

写真提供＝荘内日報社

もり・あつし／1912―1989。長崎市生まれ。幼少年期を朝鮮で過ごし、東京旧制第一高等学校に入学。この頃、菊池寛や横光利一と知り合い、1934年に処女作『酩酊船』を発表。その後、全国（主に庄内）を放浪し、1973年、61歳で『月山』を発表、芥川賞を受賞する。『われ逝くもののごとく』は森敦の人生観や死生観が結実した超大作。



写真の初版本は現在入手困難

あらすじ

庄内地方の地誌を網羅した舞台で、あらかた（8割）は登場しない語り手によって、父の戦死を皮切りに、じさま・ばさま、周りの者たちの事故死や自殺などの尋常ならざる死に遭遇しながら遍歴する主人公サキが物語られる。その後「わたし」が登場して前の物語を語り直す。ここで主要人物の上海が登場する。そして再び「語り手」によって善念大日様の縊死までが語られた後に再度「わたし」が登場し、自らが主人公として回想に浸る。（講談社）

はるやま・すすむ／1948年、酒田市生まれ、鶴岡市在住。元山形県立博物館館長。庄内民俗学会幹事。昭和28年に朝日村大網で越冬し、森敦と同じ空気を吸ったことが機縁となり、森文学に傾倒するようになる。森敦文学保存会代表。

特集 Special Edition 文学の風景 庄内

「森の供養」は、庄内の信仰風土を語る稀有な祖霊信仰で、その《生と死の循環》思想こそ、この物語のテーマなのである。

読者を奥へ奥へと導いてゆく、作者のねらい

文学の分水嶺において、小説と物語の水脈を分かつのは、WHYとANDである。例えば『罪と罰』のように、なぜあの老婆を殺したか、との疑問で構成されるのが小説である。

しかし、作者は読者に疑問を抱かせない。それからそれからと物語を展開して行く。読者を立ち止まらせずに奥へ奥へと導いてゆく。登場人物の死の連鎖を詮索することを許さない。作者のねらいは、謎解きでも筋立てでもなく、宗教的テーマの追究なのである。

読者を飽きさせない要因の一つに、まるで百科全書を眺めるがごとき、庄内地方に関する地誌・歴史・風俗・生業などの記述もある。庄内に住む者にとっても耳新しい蘊蓄（うんちく）がここかしこで語られている。とりわけ「森の供養」は、庄内の信仰風土を語るうえで欠かすことのできない祖霊信仰の希有な民間習俗であり、この風習が後に文化庁の指定を受けることなど、作者は知るよしもない。その《生と死の循環》思想こそが、宗教小説と評される由縁である。

物語は、今ではクラゲ水族館で有名な、鶴岡市加茂を中心に、庄内全域を舞台として展開される。その加茂の「なになに様もなになに様、その筆頭といっていいご大家の出」として登場する「上海」と呼ばれる人物だけが、なぜか逝かずに最終場面まで顔を見せるのであるが、「上海」は加茂の素封家・故秋野氏がモデルで、物語内の方言も秋野氏が伝授したのであった。また、作中無比の特異人物である「善念大日様」は、一冬、森敦とともに注連寺に寄寓していた男だったそうな。

特集 | Special Edition

文学の風景 庄内

安部公房『砂の女』

文・森 繁哉
text by Mori Shigeya

苛酷でも人間を活かしさえする風土に互いの交渉、関係が、生活の実相だと知る。庄内の人と自然は、「生存すること」の原型

安部の想、心を捉えた浜中、飛砂の光景

忘れられない小説なのである。本を閉じた後も、読後感が、いつまでも（おそらく永遠にではないか）、こころの襞に浸み込み、ついには自分のからだの一部になってしまうような作品なのである。飛砂の中で暮らす酒田市浜中の集落光景を映した一枚の写真によって、抱えていた想が一気に滑り出し、世界の名作とまでいわれた小説が生み出されたのは、浜中集落の印象が安部の心を深く捉えたからに違いない。

硬質な文体で、実験的に人間の不条理、不可解性をえぐり出すような作風の安部には、もともと『砂漠の思想』（講談社文芸文庫）のような「砂」という物質に執着する嗜好がある。積んでも積んでもすぐさまに崩れてしまう「脆さ」は砂の性質なのであるが、安部はそこに、人間の不条理性を見る。海風に乗って執拗に迫りくる飛砂は、人間を諦念にさえ誘うのかも知れないが、安部は、壊れやすさという、もうひとつの人間の側面を、そこに発見するのである。人間は、切ないほどに不・安定なのだ。砂のように。安部の小説は、こうした人間の、痛ましい無常を鋭く切開していく。

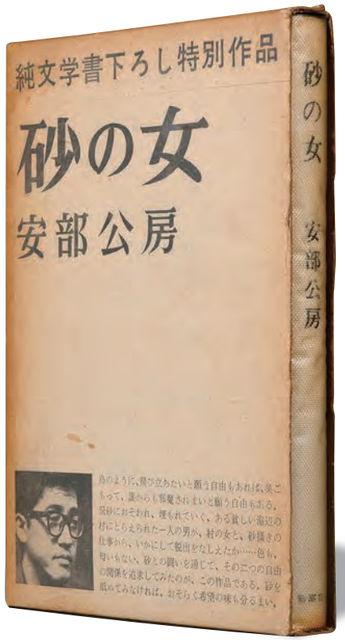
しかし安部は、ニヒリズムの作家ではない。小説に登場する砂の底穴で暮らす女は、「営みの掟」に盲目的に従っているようで、実は人間の原型を生きる人のように描かれる。砂穴に迷い込んだ昆虫採集マニアの男との関わりから見えてくる女の行為に力さえ感じられるのは、安部が、風土という場に囲われながらも、なお切実に、滑稽なほどにたくましく生きざるを得ない人間の在り方を肯定的に見ているからだ。

幻視に重なる現実人間と自然の生存の景

浜中の隣村、十里塚の『十里塚村誌』（長井政太郎編著・十里塚部落）を読んでいくと、この地域一帯の凄まじいばかりの飛砂との格闘の歴史が浮かび上がってくる。しかし、写真に写し出されたムラは、どこか幻想的で、安部が見たであろう「幻視のムラ」が浮かび上がってきそうだ。人々はここで、厳しい自然と関わりながらもしたたかに、丹念に生活を築いてきたのだ。安部は、そうした人々を風土の追随者のように描きながら、実はそのことは、人間の営みの厳粛さと愛しさなのだと宣言するのだ。

この小説を読み進め、その読後感が深くからだに浸透してくるのは、自然に剥き出されるように生きることと、苛酷ではあるが人間を活かしさえする風土との、互いの交渉、関係が、生活というものの実相なのだと知らされるからかもしれない。庄内の人と自然は、このように、「生存すること」の原型なのだ。

（右）漁師小屋が点在する、昭和20年代の酒田市浜中の海岸。庄内砂丘は、長い砂防の歴史と共に語られる。
（左）造林を妨げるように堆積した砂を人力で運び出す。
写真提供―浜中民具資料館



あらすじ

砂丘に昆虫採集に出かけた男が、砂の稜線に接した穴の家に閉じ込められてしまう。男は、あらゆる方策をもって家からの脱出を試みるが、そこに住む女は、家を守るために、男を引き留めようとする。やがて男は、砂掻きなどを手伝いながらの女との生活に、秘かな充足さえ感じてくる。男は、男の逃亡を妨害し、2人の生活を淡々と眺める集落の人々との心理的格闘などを経て、自由になることの執着を、徐々に、徐々に、喪失していく。（新潮社）

もり・しげや／舞踏家、民俗学者。1947年、山形県大蔵村生まれ。東北芸術工科大学東北文化研究センター教授などを経て作家活動に入る。主著に『生命と舞踏』ほか。インタークロス賞等、受賞歴多数。東北公益文科大学非常勤講師。

あべ・こうぼう／1924―1993。東京府北豊島郡（現在の東京都北区）生まれ。少年期を満州で過ごし、東京大学医学部を卒業。1951年、『壁』で芥川賞を受賞。1962年発表の『砂の女』は読売文学賞やフランスの最優秀外国文学賞を受賞。諸外国で翻訳され、高い評価を受ける。1973年には演劇集団「安部公房スタジオ」を旗揚げ。他の著書に『箱男』『方舟さくら丸』などがある。

立原正秋『雪のなか』

文・東山昭子
text by Higashiyama Akiko

農と能が生き続ける黒川の里、冬の王祇祭

「月山のふもとしんしん霜夜にて
動かぬ闇を村とよぶなり」
「黒川の神らことごと担はれて吹
雪かれゆきぬお能神事に」
馬場あき子『歌集 葡萄唐草』

黒川能の里は月山のふもとにある。うつろう自然の彩りのなか、農に生きる人々が豊穣を祈り、魂で守り続けてきたお能である。

王祇祭は五百年以上にわたり、厳寒の二月一日から二日にかけて、夜を徹して鎮守の春日神社に奉納されてきた。しんしんと降り積む雪はその白さですべてを浄め、村人の襟を正しての営みを、祖霊の在ます月山の神々も遠くに見守る、凛冽の冬の祭典である。

立原正秋の『雪のなか』では、主人公たちをこの世界に誘い込む。鎌倉彫の老舗を兄の急逝で思いがけず継ぐこととなった主人公、白河泰次は、鎌倉彫に価値を見いだせないで、能面を観、能面を彫ることで、自分の生を確認しようとしている。そして、黒川能を知る。訪ね来た鶴岡市郊外、黒川の里は、今も昔も静かな純農村である。黒川の能役者は今でこそ多角的な複合農家とならざるを得なくなっているが、当時から農作業をしながら地謡の稽古を積む人の多い、農と能に精通した村である。子どもから大人まで村人すべてに、四季折々の能が生きている。都会からの訪問者はきっと「農と能」が当たり前に一体化され、五百年もの間、村を護って生きてきたことに、白河と同様に驚くであろう。「野良仕事で陽灼けし、節榑(ふしくれ)立った手をもった一人の農夫が、↘

（左）「一人の農夫が匂うばかりの女に変容する様」や、古式のまま続けられている黒川能に惹かれる様子が作品中で描かれる。（右）道を雪の壁が囲う王祇祭の頃。

写真提供＝黒川能保存会

**黒川の能は人に見せる能ではなく
信じる人々が神に奉げる能であり、
大地にしっかり根を下ろし
時間を超えていることに感動する**

転生の思想を宿している。人々にとって「御山が見ている」が今に生きる山である。白河も、黒川の能は人々に見せる能ではなく、信じる人々が神に奉げる能であり、大地にしっかり根を下ろし、時間を超えていることに感動する。「雪の積もった後の晴れた冬空の月夜を、一頭の蒼い馬が、死者の魂をのせて月山に駆けて帰る」と葉津は語ったが、王祇祭に感動して、匂うばかりの女に変容する様」を見、感動した白河は、情人の葉津を誘い、王祇祭を訪ねる。鶴岡出身の葉津は、祖母から聞いたという「月山の蒼い馬」の話をする。

清浄なる冬の月夜 二人が往く雪のなか

能の里を懐に抱く出羽三山は、現世の幸せを祈る羽黒山と、祖霊の安らぐ死の山月山、そして再生の湯殿山と、生き死に甦る輪廻↖宿までの道を歩いて帰る二人は、降る雪のなかで馬の蹄の音をかすかに聴くのであった。

出羽の国、黒川の里の能の世界を舞台に、大人の恋情のはかなさをにじませながら、生きる意味、おのれの存在の不確かさを思う白河は、生きてゆく方途をつかみ得たのだろうか。立原正秋の筆致は、死を予感させる純白の雪に似た、清冽な抒情を描き上げている。

たちはら・まさあき／1926―1980。旧朝鮮慶尚北道（現在の韓国慶尚北道）生まれ。早稲田大学国文科中退。世阿弥の『風姿花伝』をはじめ中世の日本文学に傾倒。『薪能』『剣ヶ崎』で芥川賞候補、『漆の花』で直木賞候補となり、1966年に『白い罌粟』で第55回直木賞を受賞。「純文学と大衆文学の両刀使い」を自称し、文壇において確固たる地位を築く。代表作に『冬の旅』『残りの雪』ほか。『雪舞い』『冬のかたみに』などの名随筆も多数。

あらすじ

主人公白河泰次は、鎌倉彫白居堂の当主。店は妻の有紀子に任せ、半月に一度、なじみの酒蔵、葉津のもとへ通って情を通じながら、ひたすらに能面を観、彫り、中世の世界にひたろうとしている。当時、一般的に秘事能とされた「黒川能」を知り、春に二度訪ね、神々に祈る黒川能にふれる。5年後、鶴岡出身の葉津を誘って王祇祭を訪れる。演能に感動した2人は、雪のなかを鶴岡まで歩いて帰ろうとして、死者の魂をのせて駆ける蒼い馬の蹄の音を聴く。（講談社文庫）

ひがしやま・あきこ／郷土文学研究家。山形県高畠町生まれ。庄内地域の高校で国語科の教員を務め、東北公益文科大学兼任講師等を歴任。平成元年、『庄内の風土 人と文学』で高山樗牛賞、平成17年には齋藤茂吉文化賞を受賞。現・鶴岡市芸術文化協会会長。

庄内写真季行 25 鳥海山・勘助坂

鳥海山が雪に包まれていく。冬毛に変身したノウサギが跳ねる。イヌワシが舞い、雪原をうかがう。

冬の鳥海山に入って風景と対面する。ほほにあたる烈風は凍えるほどだが、厳しさの中に立って、生きものを見つめる幸せがここにはある。

厳しい冬を受けて、ノウサギは警戒の耳を立て、イヌワシは狩りのできるこの時期を子育ての日々にあてる。すべてが生きるためのギリギリの知恵だ。

冬山の楽しみの一つは、その営みにふれる機会に恵まれることだろう。雪面の鳥の影、足跡から何が見えるか、想像力が試される。

写真・文＝斎藤政広

「食の都庄内」の庄内弁

遊佐生まれのメジカにつや姫、だだちゃ豆
庄内豚に庄内麩や平田赤ネギ、山菜
民田ナスに温海カブ、しそ巻など。
これが「食の都庄内」のTHE・庄内弁。

日本海に沈む夕日を眺めながら、特急いなほにゆられて「食の都庄内」をゆったり味わう。そんなイメージで作られた駅の弁当「庄内弁」が、発売以来人気を集めている。

企画は庄内観光コンベンション協会と食の都庄内ブランド戦略会議によるもの。レシピの考案者は「食の都庄内」親善大使の土岐正富氏。そして製造は、精肉業を中心にお弁当や総菜を製造販売する鶴岡の㈲ミートデリカ・クドー。「山形日和。」観光キャンペーンに合わせて2015年6月13日から期間限定で発売を開始したが、予想を上回る反響に、販売を無期限で延長した。

人気の秘訣はお弁当の内容だ。庄内各地の食材がまんべんなく入るように土岐氏が配慮した献立は、まさに東西南北の庄内がてんこもり。なかでもだだちゃ豆入りつや姫の太巻きを遊佐生まれのメジカ鮭で巻いた「めっこい巻」は、酒田の料亭で腕を振るった氏の庄内弁オリジナルで、彩りも味わいも日本料理の粋が詰まった逸品だ。

そしてもう一つの魅力が、駅弁界ではめずらしく無添加であること。「口に入るものが命をつくる」と、水から調味料、食材、調理法まですべてに気を配ってきたミートデリカ・クドーならではの心意気だ。当初は「めっこい巻」の想像以上の難しさに製造自体を固辞したそうだが、今は「食べた人が健康で幸せに、そして笑顔になってほしい」と、毎朝4時から弁当作りに精を出している。

庄内のおいしさも、庄内人たちの思いも、すべてがギュッと詰まった待望のお弁当。食の都庄内の新たなシンボルに、大きなエールを。

庄内弁の販売場所は、2015年12月現在、JR酒田駅KIOSKとJR鶴岡駅NEWDAYS、庄内町新産業創造館クラッセ（土日限定）の3ヵ所です。他、ミートデリカ・クドーでは予約販売も実施中。前日までの予約で注文は1個から。宅配サービスも相談可。また弁当にはおしながきの他、「メジカ」と「食の都庄内」の説明書も入っています。

（有）ミートデリカ・クドー　0235-22-1297

庄内俳句紀行

小春日の旧青山本邸を歩く

季語 小春日（こはるび）
冬の季語。立冬を過ぎたあとの良く晴れて春のように暖かい日。またその日ざし。

もういつ雪が降ってもおかしくない、
利休鼠（りきゅうねずみ）の雲に凌駕される日々。
長い冬を目前に控えた朝、
こんなにも青い空があったのかと
ご褒美のような一日に心を躍らせた。

旧青山本邸

遊佐町青塚で国道7号から海岸の方へ入ると、漆黒の瓦屋根の家々が建ち並ぶ。願専寺を通り過ぎたところで、黒塀と赤松の枝ぶりが、冬の澄み渡る青空にさらに彩を添えて出迎えてくれた。

寒月華石置屋根に咲かせたる

―あべ小萩

遊佐町比子に生まれた青山留吉は、24歳で単身北海道に渡り、漁業一筋に48年。鰊漁で北海の漁業王といわれ、一代で巨万の富を築いた。旧青山本邸は、明治23年に、留吉が生まれ故郷に錦を飾るために建てた本邸である。庄内地方の江戸時代からの間取りや意匠を引き継ぎ、和風住宅建築を代表するものとして、平成12年12月4日には重要文化財に指定された。

冬あたたか春慶塗を差鴨居

―あべ小萩

座敷

大暖簾

切妻造の母屋は、下手正面の矩折（かねお）れに角屋（つのや）を突き出し、実際より大きく見える。中に入ると春慶塗の欅の柱や床、継ぎ目のない一本の長押（なげし）、差鴨居など美麗を極めた素材に思わずため息が出る。山十のしるしと三柏の家紋の大暖簾に、留吉の想いを感じた。離れ廊下の前には「神庭」といって、金に糸目を付けず造園させたという枯山水回遊式庭園が広がる。この庭は、雪が降るとまた違った趣を見せてくれる。

飛島へ半里の視界波の華

―石井伯亭

青塚からの日本海

正月二日、青塚の砂浜に立っていた留吉は、繋れた父の舟のもやいを密かに解き、北風の吹く中、孤舟を出し、見知らぬ大地への夢に燃え滾っていたという。留吉の姿に思いを馳せ、本邸前の小径を歩いて砂浜に出た。冬の怒濤の日本海は、人を寄せつけない日も多い。しかしこの日は、見事な鳥海山が裾野を静かに海へ垂らし、水平線に飛島を一望する、当時と変わらぬ海景が広がっていた。

庄内柿にある日突然雪が来て

―鈴木真砂女

留吉は、明治9年から20年かけて着実に事業を展開し、北海道小樽市に青山漁場を確立した。「鰊は魚に非ず、米なり」といわれるまでになり、大正12年には北海道小樽祝津に別荘（旧青山別邸）を建てた。今はしずかに佇むこの別荘だが、鰊漁の全盛の頃を想わせる華やかさが残る。そして、本邸には留吉が築いた栄光の寂が残った。静寂がすむ夢のあとに、今年も変わらず冬が訪れる。

青山留吉は、勤勉と倹約、そして飽くなき情熱のごとく、赤々と柿花火が蒼穹の冬空に散っていた。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）
◆旧青山本邸　遊佐町比子字青塚155

柿花火